

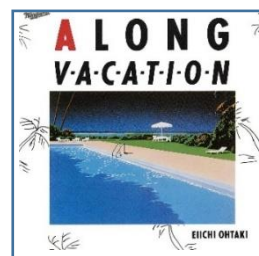
秋の読書会特集号

記録的な猛暑も去り、あつという間に肌寒さを感じる季節となりました。先日、校舎の上空を二羽の白鳥がクォンクォンと鳴きながら飛んでいる姿を早くも目にしました。

しかし、まだまだ読書の秋、時にはスマート・本(フォン)を置いて、もっと素敵な本を手にとってみませんか。LHR では次回から2週にわたって読書会も予定されています。

前号に続いて今号の「岩手をたなつか!! Part2」で紹介している書籍も読書会用にそろえてあります。これを機会に是非読んでみてください。

ちなみに、岩手県出身の大瀧詠一、皆さんは聴いたことがありますか。こちらも必聴です。



今回の1枚

A LONG VACATION

大瀧詠一 1981

(岩手県出身)

◆◆ 蔵書紹介 ◆◆

“いわて”を「たなつか!!」 Part 2

※**たなつか** FM 東京「山下達郎サンデーソングブック」で、氏が自宅の棚から一つかみしたレコードをかけるコーナー

『国萌ゆる』平谷美樹 (ひらや よしき) 実業之日本社



前号の「米内光政」に続いて、今回は、今年没後 100 年を迎えた平民宰相、原敬を取り上げます。憲政史上初の「平民宰相」として名高い原敬の名は、日本史を選択している人は授業でも覚えがあると思います。戊辰戦争に敗れ、賊軍の汚名を着せられた盛岡藩士の子として生まれた原敬は、維新後自ら平民(華族=士族(もと武士)の下位)となります。そこから、第 19 代総理大臣となり日本の政党政治、民主主義の基礎を築くも、1921 年 11 月 4 日、東京駅で暗殺されます。

この本は小説仕立てで読みやすく、読後は岩手県民として誇らしい気持ちになります。作者の平谷美樹氏も岩手県出身・在住の歴史時代作家です。

『私の宮沢賢治 賢治との対話』 C.W.ニコル ソレイユ出版

宮沢賢治はいわずと知れた、日本でもっとも有名な岩手県人です。10 年ぶりの再放送も話題を呼んだ、久慈市が舞台の「あまちゃん」でも岩手県を象徴する場面では賢治、作詞・作曲の「星めぐりの歌」が流れていました。作家・エッセイストであり、行動的なナチュラルリストとして世界中を駆けめぐってきた C・Wニコルさんは、若かりし頃、詩人であり教育産業の経営者でもあった谷川雁(たにがわがん)氏との出会いによってもたらされた賢治作品の翻訳という仕事を入り口に、その奥深い世界にのめり込んだといいます。今日、未曾有の自然災害が多発し、ウソや驕り、憎しみや貧困が渦巻いています。そんななか、この本は、多くの人に生きる勇氣と希望を持ってもらえる、松明や羅針盤としての役割を果たしてくれます。



『石川啄木という生き方 二十六歳と二ヶ月の生涯』長浜 功 (ながはま いさお) 社会評論社



宮沢賢治と並ぶ、岩手が誇る文学者。石川啄木ほど評伝の多い人物も珍しいです。どんなに有名でも個人について書かれた伝記というのは数冊です。ところが啄木について言えば、大正時代から今日まで何十冊もの評伝があり、ともかく文学界では傑出した人物であることがうかがえます。著者が、「小説とドキュメントの間に位置する」と解説する本書は、読みやすい文体で書かれているので、この岩手が生んだ偉大なる詩人の入門書として、ぜひ一度手に取ってほしい本です。

『大谷翔平 メジャー120年の歴史を変えた男』 ジェフ・フレッチャー 徳間書店



今年も数々の大記録を打ち立て、私たちの胸を熱くさせてくれた大谷選手。二刀流の「史上最高のメジャーリーガー」は、どのようにして生まれたのか？なぜ、大谷翔平はメジャーで MVP を受賞できたのか？

全米が驚嘆した大谷の凄さと活躍の秘密をメジャーサイドから徹底解明した本書は、米野球殿堂入りを決める投票資格も持ち、エンゼルス番として 10 年目を迎えた記者による、大谷選手の MLB ルーキーイヤーから 4 年間にわたった密着取材からなっています。残念ながら来年はバッティング一刀流での出場になりますが、本書で大谷選手は述べています。「僕は投げ続ける必要があるんです。毎回、投げるたびに何か新しいことを学びますし、力も上がっているんです。これからも投げ続けます」

『甲子園と令和の怪物』 柳川悠二 (やながわ ゆうじ) 小学館新書

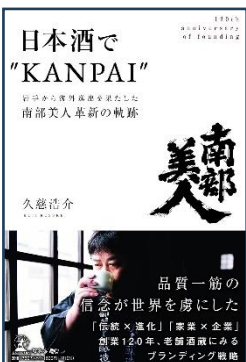
2019 年、夏の高校野球、岩手県大会決勝戦、全国的に注目の的であった佐々木朗希投手の登板回避には、岩手県民のみならず全国の野球ファンが大きなため息を漏らしたものでした。しかし、その後プロ野球ロッテに入団した佐々木投手が、高校卒業後 3 年目にして日本プロ野球史上最年少での完全試合を達成した際には、日本中が歓喜の渦に巻き込まれました。

本書では、登板回避から 3 年の時を経て著者のインタビューに応じた元大船渡高校野球部監督・國保陽平氏が初めて当時の心境と決断の理由を語っています。

佐々木投手の高校時代の経験は甲子園の伝統を破壊し、選手としての将来を選ぶことが重要であることを示しています。これは日本野球における大きな転換点と言えます。そして彼のキャリアは、甲子園に出場しなくてもプロ野球で成功することが可能であることを証明しています。



『日本酒でKANPAI 岩手から海外進出を果たした南部美人革新の軌跡』 久慈浩介 幻冬舎



本書には、創業 120 年の老舗酒造がいかにして世界で勝負できるブランドに成長したのかがつづられています。

二戸の「南部美人」五代目として蔵元を引き継いだ著者は「世界の南部美人」にしたいと、1990 年代後半から他の酒蔵に先駆けて海外市場へ進出しました。当時、海外では中国で製造された酒が日本酒として出回っていたり、日本で造られた酒も適切な温度管理がされず劣化した状態で売られていて、日本酒はおいしくないイメージを持たれていました。そんななかで、海外の文化に合わせた料理との組み合わせや飲み方、管理のポイント等をプレゼンテーションし、海外の販路開拓を推し進めた結果、南部美人は遂に世界最高峰のワインコンテスト「インターナショナルワインチャレンジ 2017」で「世界の日本酒」の称号を獲得するまでになりました。皆さんがこの味をわかるようになるのはいつかな。

『もりおか物語 〈5〉 上田かいわい』 盛岡の歴史を語る会 熊谷印刷出版部

今年度杜陵高校では、地元である上田町内会の方々と交流する機会が多くありました。これを機に盛岡、上田の歴史をひも解いてみませんか。本書は今は絶版となり、市内の古書店やネットでも入手困難な貴重本です。江戸時代、上田には奥州街道に接続する主要な街道筋として、城下盛岡の北の惣門（城下に出入りする関門）が設けられていました。また、第 2 次世界大戦当時、陸軍大臣を務めた板垣征四郎は幼少期を上田で過ごしています。

ちなみに、前号で紹介した米内光政は、同じ時期に海軍大臣を務めていました。

